



みなもと

恵みの源

受け継がれてきた水資源

和歌山県
紀の川市

目次

ごあいさつ	紀の川市長	中村 慎司	1
水資源所在地マップ			2
■水資源の役割	(紀の川市)		4
水源林			4
農業用水路とため池			6
棚田の起源は紀の川市？			7
■地域の水資源	(高木徳郎)		8
ホリキリと鞆淵の棚田			8
荒川荘地域の棚田			11
権現の滝			13
龍門山			13
百合山			14
安楽川井用水			14
トンネル池			15
「権大さん」伝承と尼寺の棚田			16
平池・前田池			17
諸井頭首工と山田ダム			18
藤崎井用水			19
魚谷池・中後池			20
曾淵神社と龍王神社			22
平野の棚田			23
井上本荘地域ため池群			24
池田荘地域の棚田			26
木積川渡井			27
ホツとする風景			28
記録 棚田学会シンポジウム			33
棚田のルーツを探る			33
あとがき	棚田学会長	中島 峰広	49

※「水資源」の定義について

一般には、農業・工業・発電などに利用しうる資源としての水のことを指しますが、本稿では水源林、棚田、農業用水路、ため池なども含む資源として定義します。



紀の川市は、和歌山県北部に位置し、果実生産額西日本一など農業を基幹産業とする人口約七万人の市です。この紀の川市の農業を支える「農業用水」は、用水路やため池などを通じ、市周辺や紀の川上流、十津川上流の「水源林」からもたらされています。市内には森林などを管理する「財産区」や用水路などを管理する「土地改良区」があり、森林・用水路などの良好な管理を通じて、農業や農村環境、ひいては私たちの「命」を支えてくれています。また、鎌倉時代に「ため池」の池敷の売買の記録、室町時代に「タナ田」の文字が文献上残されているなど、市内の農業用施設についても多くの歴史的・文化的な資源が受け継がれてきました。

今回、紀の川市のもつこれらの貴重な資源について啓発する目的で、シンポジウムの開催とあわせ本冊子を取りまとめることにしました。この冊子が、「紀の川市の宝物」に多くの人々が気付く機会を提供することを祈念するとともに、棚田学会、和歌山県立博物館はじめ本冊子に関わった関係者の皆様に深く謝意を表したいと思います。

紀の川市長 中村 慎司

水資源 所在地 マップ





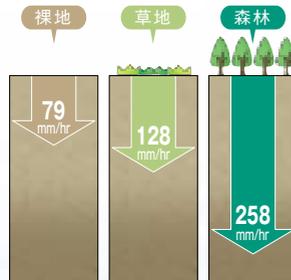
水資源の役割

水源林

紀の川市の基幹産業である農業を支える「水源林」。
森林を守ることが農業を守り、
ひいては私たちの「命」を支えてくれています。

紀の川市の基幹産業は農業。生産額で全国一位のはっきり、いちじく、二位の桃、三位の柿、四位のキウイフルーツなど西日本一位の「果物王国」です。この農業のためにはなくてはならないのが農業用水。そして、この農業用水をもたらしてくれるのが紀の川などの上流域にある森林です。このように農業用水などの水源となっている森林を「水源林」といいます。

健全で良好な状態の森林は、水源のかん養機能などをもっています。つまり、「水源林」が適切に維持管理されることを通じて、紀の川市の農業用水、農業、ひいては私たちの「命」を支えてくれているのです。紀の川市の水源地域は、市内及び近隣の山々、紀の川上流域、十津川流域などに分散しています。私たちは、これらの水源地域の森林を守ってくれている人々の努力に思いを致すことが必要です。

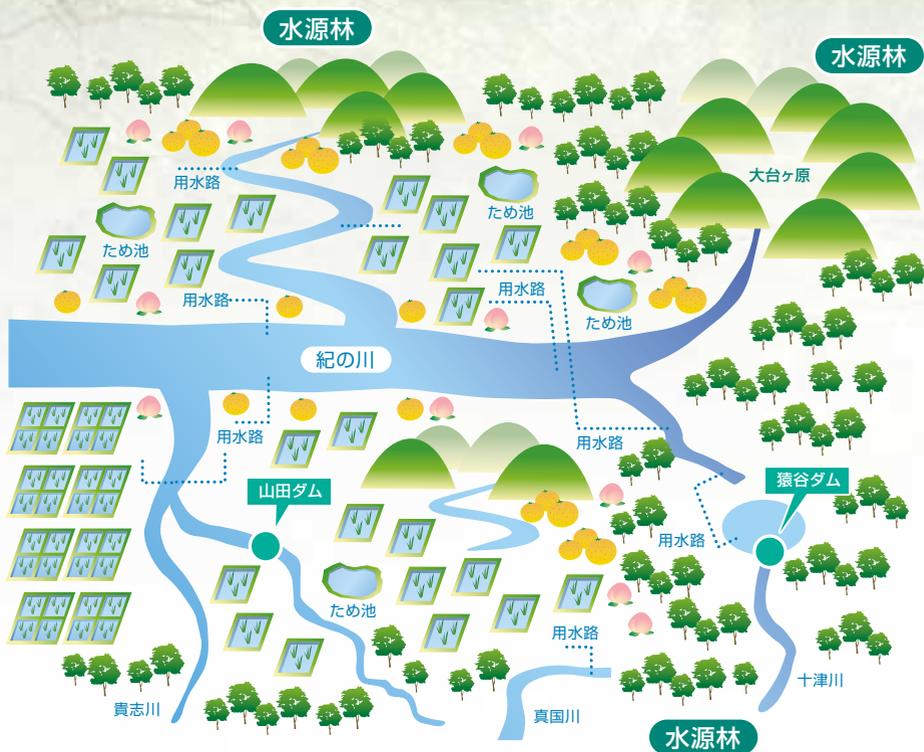


■ 紀の川市内の水源林 (間伐済みの森林)

水源のかん養など水源林の機能は、間伐などが適切に行われることにより発揮されます。紀の川市には森林などを管理する14の財産区があり、水源林を守ってくれています。

■ 森林その他の浸透能

森林は、裸地と比べて約3倍の浸透能(水を吸いこむ能力)があります。
出典：平成19年版 森林・林業白書



■ 森林の間伐体験

農業用水水源地域保全対策事業による森林体験などを通じて、子供たちに「森林の大切さ」を感じてもらうことが大切です。



■ しのお 椎尾山 (名手川の合流付近) 所在地マップ: [1]

市北東部を流れる名手川は、昔から左右岸の村々が水争いを繰り返したことで全国的に有名です。名手川上流にある椎尾山の領有権をめぐる争いが繰り返されました。昔からの「山」と「水」の深い関係を示しています。

農業用水路とため池

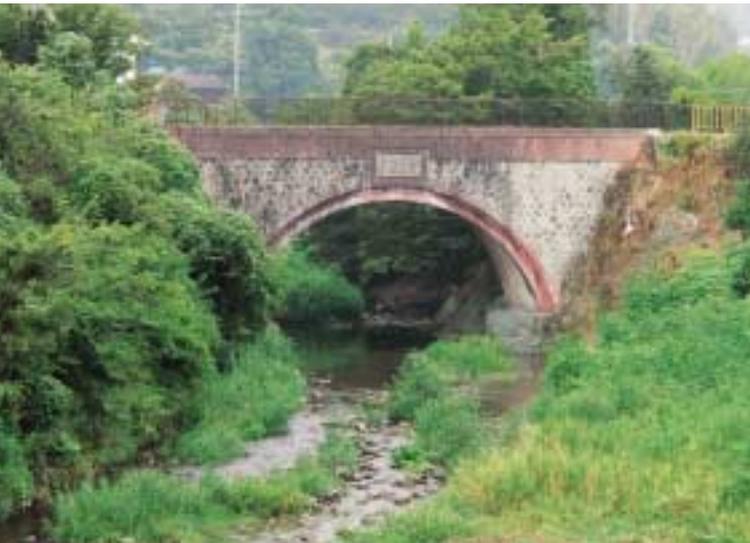
紀の川市には、網の目のように張り巡らされた農業用水路と数多くのため池があります。それぞれ深い歴史を有し、今でも農業生産に大きく寄与しています。

■農業用水路について

紀の川市には、農業用水路が網の目のように張り巡らされています。その中でも、紀の川用水、小田井用水、藤崎井用水、荒見井用水、安楽川井用水、貴志川用水などは幹線水路としてたくさん水を運んでいます。歴史的な水路も多く、穴伏川あなふしにかかると小田井用水の水路橋・龍之渡井たつのといなどは、国登録文化財となっています。これら農業用水路のおかげで、紀の川市は、和歌山県下一位を誇る農業生産をあげることができているのです。

■ため池について

紀の川市には、七八六ヶ所のため池があります。ため池は、主に農業用水を貯水するために谷あいなどの地形を利用して造られたものです。水不足に苦しんだこの地域では有史以来多くのため池が造られました。鎌倉時代に農民たち自身が造った記録の残る「魚谷池うおだに」や江戸時代に徳川頼宣公の命により造られた「桜池」など深い歴史を有するため池が数多くあり、今でも紀の川市の農業生産に大きく寄与しています。



たつのとい
龍之渡井

所在地マップ:[2]

18世紀はじめ、紀の川の北岸に、学文路[かむろ]（現橋本市）出身の大畑才蔵が小田井用水を造りました。穴伏川にかかると小田井用水の水路橋として大正時代に架け替えられ、今でも活用されています。



うおだに
■ 魚谷池 所在地マップ:[3]

紀の川市粉河地区にある魚谷池は、鎌倉時代、池の敷地の売買記録や池の水配分に関する史料などが残されています。粉河の農民たち自身が造った記録が残り、現在でも活用されているという点で、歴史上かけがえのない価値をもった池といえます。

棚田の起源は紀の川市？

日本の原風景といふべき「棚田」。紀の川流域には棚田の起源とされる文献が残されています。この貴重な「宝物」をどのように守り活用していくのが今後の課題です。

日本の棚田の第一人者・早稲田大学の中島峰広名誉教授の著書「日本の棚田」の冒頭に「棚田の起源」として紹介されているのが紀の川市桃山町の棚田。室町時代の高野山文書に文献上はじめてこの地域の「タナ田」が記載されているのです。現在、その土地は桃畑などとなっていて、「棚田」の原形はとどめていませんが、これら歴史深い「宝物」を、紀の川市の貴重な財産としてどのように活用していくのが、今後の大きな課題です。



いよだに
■ 五百谷の棚田 所在地マップ:[4]

紀の川市には、山間部を中心に多くの棚田が残されています。棚田は、傾斜地にある棚状の田んぼのことで、おコメを生産する機能以外に水源のかん養、国土の保全、景観形成などの多面的な機能があり、全国的に保全活動が盛んです。しかし、農家の高齢化などが進む中、これからどのように棚田を守っていくのが課題です。



ホリキリとともぶち靱瀧の棚田

地域の水資源

■ ホリキリ 所在地マップ:[5]

靱瀧地区最大の用水路・大湯が最初に用水を供給する水田の直前、真国川に突き出た岩盤を切り通し状に掘り抜いた水路。室町時代の史料に「ホリキリ」の地名がみえ、水利慣行などから、平安時代、石清水八幡宮によって開削されたと想定されます。

■所在地情報・紀の川市中靱瀧 県道かつらぎ桃山線沿い 靱瀧選果場近く

平安時代以来の水路!? 鮮烈な伝説とともに今も残る、 人と自然の調和の姿。

紀の川市よこぶち鞆渌地区。平安時代、石清水八幡宮の支配下にあった鞆渌地区では、同宮が用水路を開削して水田開発を進めていきました。中でも、鞆渌地区のうち境石・新子きょういし・新子あたらしなどのエリアを灌漑する大湯は、その最大のもので、しかもその開削にあたっては、非常に硬い岩盤を掘り抜く難工事をしなければならず、掘り抜いた瞬間、地中から激しい血

しぶきが上がったと言います。それはこの岩盤が飯盛山の神の足の骨だったからで、以後、鞆渌では、神の怒りを買って力の強い男は生まれなくなつたそうです。伝承はあくまで伝承ですが、強い男が生まれないとという代償と引き替えに、鞆渌の人々は豊かな水の恵みを得られたわけで、人と自然のぎりぎりの調和のあり方を示す伝承と言えます。



■ 鞆渌八幡神社 所在地マップ:[6]

ホリキリ(大湯)を築造した人々は、石清水八幡宮の別宮であるこの神社を拠点としていました。今、この神社には平安時代末期に制作された神輿[みこし](国宝)が伝えられています。

■所在地情報・紀の川市中鞆渌 県道かつらぎ桃山線沿い 市立鞆渌小中学校付近



■ 和田の棚田 所在地マップ:[7]

下鞆渌の和田集落はすり鉢状の地形に民家と棚田が広がっています。集落の名前は南北朝時代からみえ、この頃から勢力を伸ばし始めた武士団の本拠地のひとつがここにあったと考えられています。

■所在地情報・紀の川市下鞆渌 県道かつらぎ桃山線から県道高野口野上線に入り前川橋付近

狭い谷を縫うように広がる棚田。
その開発は森の開発でもありません。

鞆渚地区では、本流である真国川に流れ込む支流の枝谷などに沿って、小規模な棚田が点在しています。これらの地域は室町時代の史料にはその地名がみえ、この地域の棚田開発の歴史の古さを物語っています。同じ頃、鞆渚地域は、高野山へ大量の薪炭を供給するようになります。棚田開発と薪炭林の開発は連動していたのかも知れません。農地と森の調和的な開発のあり方を示しています。

久保谷の棚田

所在地マップ:[8]

上鞆渚・久保の集落へ向かう久保谷川沿い・向谷の棚田。奥が神谷の棚田。

■所在地情報・紀の川市上鞆渚 県道かつらぎ桃山線から「ともぶち霊園」方面へ入る



本川谷の棚田

所在地マップ:[9]

鞆渚八幡神社付近で真国川に合流する本川を遡り、最奥に位置する大垣内の棚田。

■所在地情報・紀の川市中鞆渚 県道かつらぎ桃山線沿いの鞆渚八幡神社西で北へ入る



大垣内の棚田

北所の棚田



みつなが
■ 光長の棚田 (右)
所在地マップ:[10]

野田原川沿いには、小規模ながら棚田が多い。野田原の地名は、平安時代末期からみえます。

■所在地情報・紀の川市桃山町野田原 県道垣内貴志川線の柱谷橋付近から北へ入る里道を5分ほど上る

ところがいと
■ 所垣内の棚田 (左)
所在地マップ:[11]

半円形をしたこの棚田のユニークさは、対岸の山道の途中から見下ろすとよく分かります。

■所在地情報・紀の川市桃山町野田原 県道垣内貴志川線沿い

あらかわのしょう
荒川荘地域の棚田

五〇年早く生まれた紀州の楠木正成—
悪党・源為時の本拠地に点在する美しい棚田群。

「あら川の桃」の「あら川」は、かつてこの地域に広がっていた高野山の所領の名前に由来する地名です。鎌倉時代後期、支配を強める高野山に対抗して、流通の動脈・紀の川を基盤に結合した武士団がいました。その棟梁の名を源たもと為時ときといい、高野山は支配に従わない彼らを「悪党」と呼びました。荒川荘は、そうした為時らの活躍の舞台でした。また、応永一三年（一四〇六）

の高野山文書には、荒川荘の「山崎」に「タナ田」があったことが記され、「棚二似タル故ニ、タナ田ト云い」とされています。



■ 元の棚田跡 所在地マップ:[12]

応永13年（1406）の高野山文書にみえる「タナ田」の比定地は、現在、道路の埋土の下になって消滅しています。



いよだに
■ 五百谷の棚田 所在地マップ:[4]

扇を広げたように三角形をした緩やかな傾斜地に、約20筆の美しい棚田が展開しています。水源は扇の要に位置するため池で、パイプや簡易な暗渠水路を用いた灌漑方法が注目されます。

■所在地情報・紀の川市竹房字五百谷 県道かつらぎ桃山線 五百谷口バス停付近から五百谷方面へ入る



権現の滝

荒川荘中心部を潤す柘榴川の源流には、
謎の修行僧・子の聖の住んだ
洞穴があった！

今から一〇〇〇年以上前、
現在のかつらぎ町下天野に住
む老女・阿字長者あじちょうしゃは、自分の
口にインドの高僧が入ろうと
する不思議な夢をみました。
やがて老女は身ごもり、子
年、子の月、子の日、子の刻
に生まれた子の聖ひしりは、成長し
て数々の奇瑞をおこして子の
権現ごんげんと敬われるようになりま
した。龍門山の南には、子の
権現が修行したと伝えられる
洞穴と滝があります。

■ 洞穴 所在地マップ:[13]

龍門山の南斜面に位置する洞穴には
石組みと簡素な祠があります。



■ 権現の滝 所在地マップ:[13]

滝は龍門山から流れ出て、柘榴
川となって安楽川地区へと流れ
ていきます。

■所在地情報・県道かつらぎ桃山線
黒川峠付近から畑野地区方面へ入る

龍門山

■ 龍門山 所在地マップ:[14]

山頂より東の尾根筋には磁
気を含んだ磁石岩と呼ばれ
る巨岩があります。

紀州富士とも呼ばれた龍門山。
古来、紀伊の湊を訪れる
船の目標とされてきました。

龍門山地の主峰をなし、美
しい山容を誇る龍門山は、キ
イシモツケ群生地（県指定天
然記念物）としても知られ、
植物種の多い豊かな水源林を
形成しています。この山から
号をとった画家・彫刻家の
保田龍門やすだりゅうもんは、「母の像」など多
くの作品を残しています。



百合山

最初カ峰とも呼ばれ、龍門山地西端の
緑豊かな水源林を形成しています。

最初カ峰は紀州の南朝方を率いる四條隆俊が、北朝方の守護・畠山国清を相手に蜂起した時、最初に立て籠もった城と言われています。古来、山地に恵まれなかった紀の川北岸地域の村々では、南岸のこの山を薪炭林として利用してきました。



■ 百合山

所在地マップ:[15]

和歌山平野を眼下におさめる眺望にすぐれ、ハイキングやハンングライダーの名所としても親しまれています。

安楽川井用水

応其上人によって「再興」された
荒川荘地域の基幹用水路。

安楽川井用水は、天正年間、木食応其によって「再興」された用水路です。応其はこの時、紀の川北岸の田中荘に対し、紀の川南岸にあった田中荘領の土地を用水路の敷地として提供させる代わりに、検校山・平野山（最初カ峰）での薪炭の採取を認めました。



■ 安楽川井用水

所在地マップ:[16]

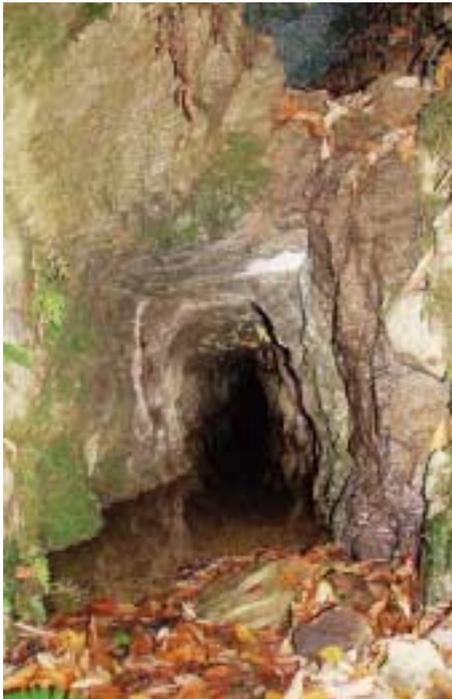
現在では紀の川市荒見で紀の川から取水する荒見井用水と統合されています。

トンネル池

私財をなげうって池の造成に命をかけた調月村・坂本文三郎村長の偉業。

明治四四年（一九一〇）、調月村長に就任した坂本文三郎は、当時、調月村東部の高台を灌漑していた増田池の供給能力を高める「秘策」として、愛宕山の東に広がる仏谷の谷水を堰き止めて池を造り、その水をトンネルによって増田池まで導水することを思い立ちました。トンネルは一〇〇メートルほどの距離でしたが、まだ重機もなく、暗闇に提灯を灯して掘る方向や角度を目

測したと言われています。工事は長期化して工費も底をついたことから、坂本村長は自ら田畑を売り、借金までしてこの事業の完成をめざしました。時には工賃の未払いや、借金の取り立てに日本刀で追いかけられながらも、ついに池は完成し、トンネル池と呼ばれるようになりました。



■ トンネル池（上）所在地マップ：[17]

坂本村長はその後、無報酬で増田池水利組合長を務め、村民から全幅の信頼を得ました。

■ 所在地情報・紀の川市桃山町調月 県道垣内貴志川線の愛宕橋から北へ入る道を上る

■ トンネル池のトンネル（左）

今もノミの跡が生々しく残るトンネル。

「権大さん」伝承と尼寺の棚田

大蜘蛛の骨が

巨岩となつて屹立するという白岩谷池。
美福門院ゆかりの地の棚田。

南面する緩やかな傾斜地に棚田が広がる尼寺地区。その一角を占める白岩谷池の周囲は、古来、純白の巨岩に黒い斑点がみえると言われ、『紀伊続風土記』では、人間を害した大蜘蛛が誅されて、その骨が化石となったものと記されています。この大蜘蛛を誅したのが岸（貴志）正平という鎌倉時代はじめの貴志荘の代官（下司）で、数々の功績により人々から崇められ、「権大神」として祀られたといわれています。



■ 大国主神社

所在地マップ:[18]

「権大さん」と呼ばれて親しまれている権大神は、今は大国主神社に合祀されています。

■所在地情報・県道岩出野上線から諸井橋西詰めを河川沿いに南下



■ 白岩谷池と尼寺の棚田 所在地マップ:[19]

池の奥に棚田がみえます。尼寺の地名は、この地にある美福門院建立の寺に由来します。

■所在地情報・市道85号線尼寺「白岩橋」付近より北上

平池・前田池

池の中に古墳!?

平地にある池の成り立ちの不思議。

現在、平池遊園として整備され、ボードウォッシングや散歩を楽しむ人も多い平池とその周辺。天水を溜めるのみの底の浅い皿池ですが、神戸・上野山地区の水源として利用されています。池の内部に前方後円墳を含む四基の古墳があることも知られています。



■ 平池 所在地マップ:[20]

古墳ばかりでなく、ナイフ形石器や細石刃なども出土していることから、先土器時代の遺跡としても注目されています。

■所在地情報・紀の川市貴志川町神戸わかやま電鉄貴志川線甘露寺駅駅前



■ 前田池 所在地マップ:[21]

前田地区の水源となっている南北に細長い前田池は、もともと尼寺村と上野山村の境にあった城の堀だったと伝えられています。

■所在地情報・紀の川市貴志川町上野山 貴志川中学校西



■ 諸井頭首工

所在地マップ:[22]

両岸に水を引くので「諸井」といいます。現在、吊り橋が架かり、そこから眺めると両岸への引水の様相が見て取れます。

■所在地情報・紀の川市貴志川町井ノ口 県道岩出野上線「井の口」信号付近に「諸井橋」が架かる

諸井頭首工と山田ダム

貴志川の両岸を一気に灌漑するスグレモノの堰。
山田ダムの完成でさらにパワーアップ。

貴志川の downstream に架かる諸井頭首工は、貴志川の両岸に水路を設けて西岸の水路で神戸・前田地区を、東岸の水路で井ノ口・岸小野・北地区を灌漑します。『紀伊続風土記』では、東西両岸から石を積んで川水を堰き、中央を開いて水を通すとあり、江戸時代末期の治水技術の高さをうかがえます。昭和三二年（一九五七）、支流の野田原川を堰き止めた山田ダムが完成し、貴志川下流域を潤す重要な農業

用水となりました。複雑に入り組んだ地形にできたダム湖の周辺は、四季折々にハイキングや釣りを楽しめる良好な景観を形成しています。



■ 山田ダム 所在地マップ:[23]

有効貯水量は337万立方メートルで、果樹栽培にも利用されています。

■所在地情報・紀の川市貴志川町高尾 国道424号線から県道垣内貴志川線を南東へ車で約10分

藤崎井用水

大畑才蔵が小田井用水に
先がけて手がけた近世大規模用水路。

■ 藤崎弁天

所在地マップ:[24]

江戸時代より、紀の川に臨んで奇岩が屹立する景勝地として知られ、藤崎の名はそのうちのひとつ、「富士石」に由来すると言われています。

■所在地情報・紀の川市藤崎 国道24号線藤崎バス停付近から市道を南下



藤崎井用水は、伊都郡学文路村の庄屋・大畑才蔵が元禄九年（一六九六）、藩の直営事業として着工した用水路で、四年後には完成しました。藤崎弁天の西で紀の川を堰き、那賀・名草二郡の五三ヶ村を灌

漑すると言われましたが（『紀伊続風土記』）、昭和二八年（二九五三）の水害で流失し、その後、紀の川南岸の荒見井用水、安楽川井用水をも統合した近代的な頭首工が完成しました。



■ 藤崎・荒見井頭首工

所在地マップ:[25]

現在の頭首工は、江戸時代の藤崎井の堰より100メートルほど下流にあります。

■所在地情報・国道24号線より市道藤崎頭首工線へ入り南下



■ 魚谷池 所在地マップ:[3]

鎌倉時代後期の永仁4年(1296)、粉河の農民が用地を買い取って既存の池を拡張したことが分かる史料が残されています。こうしたため池の築造を通じて結束を高めた農民たちは、やがて惣村と呼ばれる自治的な村落組織を作り上げていきました。

■所在地情報・紀の川市井田 県道粉河那賀線の下丹生谷大池の西詰から里道を南下

中 魚
後 谷
池 池
・



粉河の農民の血と汗の結晶。 どこにでもありそんな風景が、かけがえのない価値をもっています。

現在の紀の川市井田、JA紀の里農産物流通センターの北に位置する魚谷池は、鎌倉時代、粉河の農民たちによって

築造（拡張）されたことが文献からはつきりと分かるため池です。ため池は、わが国では降水量の少ない地域を中心にたくさん造られました。多くは弘法大師や行基など、超人的な力をもった人による築造が伝承されたり、江戸時代になって藩や義民による築

造が知られています。しかし、その一方で、築造年代がはっきり分かり、しかも農民たちの手によって造られたことはつきりと分かる事例はほとんどありません。その意味で、粉河に残る魚谷池や中後池は、

日本史上、かけがえのない価値をもっています。中でも魚谷池は、室町時代の粉河の農民たちが、限りある水資源を最も効率的に、しかも公平に分配するための帳簿を代々書

き継いでいきました。農民たち自身の手で書かれたこれらの文献は、他に類をみない、非常に珍しいものと言えます。



■ 中後池 所在地マップ:[26]

鎌倉時代後期の延慶2年（1309）、粉河の農民たちは粉河寺に訴えて中後池の敷地にかかる税の免除を求め、認められました。この年までに中後池が完成していたことが分かります。

■所在地情報・紀の川市東野 県道粉河那賀線の下丹生谷大池の西詰から里道を南下

曾^そ渎^{ぶち}神社と龍王神社

水源の森の不思議な雨乞い行事。
森を敬う素朴な信仰が、
今も粉河の人々の水の恵みを支えています。

粉河地域の水源の山では、
名手川の源流・椎尾山の西側
の谷をさらに遡ったところに、
水源の神として曾^{そぶち}渎^{ぶち}（素渎）
神社を祀っています。ここで
は、早^{かんぼら}魃^{ぼら}の際に神社のすぐ下
の滝壺の水をかすり出す、曾
渎かすりという雨乞い神事を
行うといえます。一方、かつ
ては粉河地域と激しく水争い
を繰り広げた名手地域の人々
は、大阪府との府県境に龍王
神社（葛城神社）を祀り、早

魃の際には高野山から火をも
らってきて雨乞いするとい
います。



曾渎神社

所在地マップ：[27]

急傾斜の階段を登ったと
ころに巨岩を背負うよう
に祠が立っています。

■所在地情報・県道西川原粉
河線より市道西川原奥出線へ
入り名手川沿いを北上

龍王神社

所在地マップ：[28]

和泉山脈の主峰・和泉葛城山の
山頂にある龍王神社の周辺に
は、ブナの天然林（国指定天然
記念物）が広がっています。

■所在地情報・紀泉高原スカイラ
インより葛城山頂上付近



■ 平野の棚田 所在地マップ:[29]

『紀伊続風土記』によれば、「上村下村に對し中にあるを以て平野という」とのこと。



平野の棚田

石積みが美しい
迫田の棚田。

旧那賀町域を南北に流れる
じゅうたに重谷川の東岸で穴伏川あなふしに挟まれた地域は、現在では名手上・名手下などと呼ばれていますが、江戸時代以前においては単に上村・下村などと呼ばれ、中世においては静川荘と呼ばれていました。ここでは、重谷川支流の日向谷川に沿って、石積みの棚田が十数筆、谷に沿って展開しています。

井上本荘地域ため池群

現在に残る荘園絵図の景観。
桜池の完成後も残された中世のため池遺産。

現在の長田地区は、中世において、京都の門跡寺院・随心院が支配する荘園でした。随心院には色彩鮮やかな「紀伊国井上本荘絵図」が伝えられています。そこを描かれたため池の多くが今も残されています。こうした小規模な中世のため池が連なるとつた水利体系をなす景観は、全国的にもあまり例がなく、文化的景観としての価値が高いものと考えられます。



■ 黒津池 (上)

所在地マップ:[30]

「紀伊国井上本荘絵図」では「藏人池」とされている池に比定されます。

■所在地情報・紀の川市深田・別所 長田観音北

■ 呂の池 (下)

所在地マップ:[31]

「紀伊国井上本荘絵図」では「道池」。道一路の連想からの比定で、淡路街道に面しています。

■所在地情報・市道粉河北勢田線沿い 長田小学校より北西



■ 阿弥陀池

所在地マップ:[32]

「紀伊国井上本荘絵図」の「新池」ないしは「小池」に比定されます。

■所在地情報・市道長田中打田線と市道深田北長田線の交差点より北西

■ 中泥池

所在地マップ:[33]

「紀伊国井上本荘絵図」では「土呂々々池」が描かれ、この池に隣接する上泥池に比定されます。

■所在地情報・県道粉河加太線より猪垣地区北へ市道北勢田猪垣線沿い



■ 桜池

所在地マップ:[34]

「紀伊国井上本荘絵図」に描かれた中世のため池群の供給能力を補強するため、慶安3年(1650)に紀伊藩主徳川頼宣によって着工された大規模ため池。

■所在地情報・紀の川市北志野志野神社北

池田荘地域の棚田

池掛かりの水田が多かったことから
池田の地名が起こったという、明恵上人ゆかりの里。

中三谷地区の金剛寺は明恵上人の開基という古刹で、春日明神を信仰していた明恵上人によって勧請された春日神社が鎮守社として隣接しています。古来よりの撰関家の所領でしたが、延喜式えんぎしきに載る古社・海神社の神戸・神領村のみは支配を異にしていたと考えられます。それぞれにゆかりの春日池・海神池が東西に分かれて位置しています。



■ 海神池 所在地マップ:[36]

■所在地情報・紀の川市神領
紀の川広域農道沿い 海神社北



■ 春日池 所在地マップ:[35]

■所在地情報・紀の川市中三谷
仙漢学園東



■ 東山田の棚田
所在地マップ:[37]

和泉山脈の裾野の緩やかな傾斜地に山田＝棚田が広がっています。

■所在地情報・紀の川市東山田 紀の川広域農道の海神池付近から北へ入る道を上る

木積川渡井

レンガ造りのアーチ橋

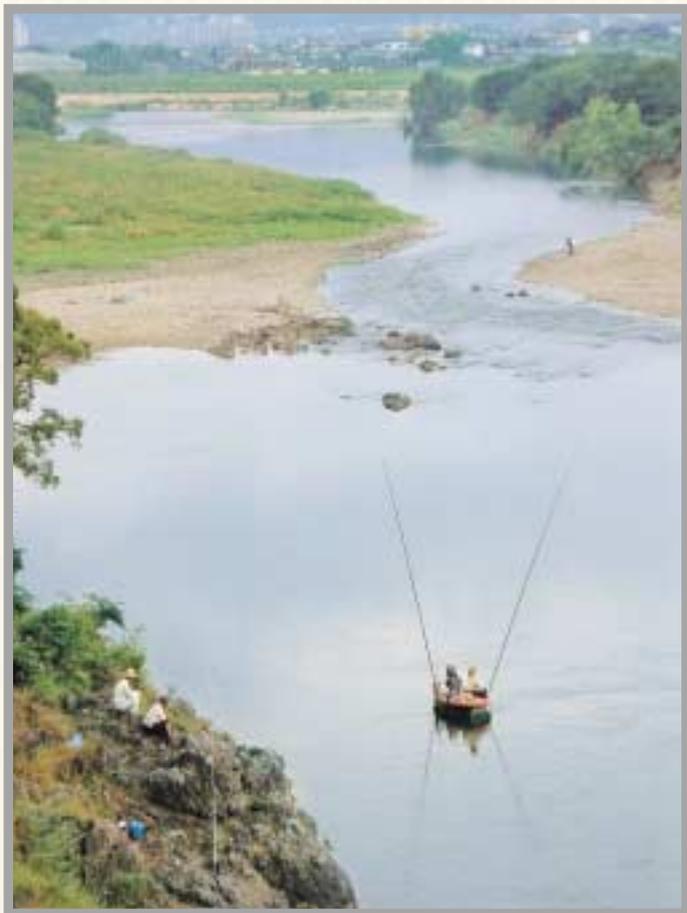
現在の橋本市から段丘の縁を西流してきた小田井用水が、紀の川市の西境を流れる木積川を越えるところに架けられた長さ六メートル、橋幅三・八メートルのアーチ橋。大正三年（一九一四）に完成したもので、それ以前は木造橋であったと考えられます。龍之渡井とともに、国の登録文化財として登録されています。



■ 木積川渡井 所在地マップ:[38]

コンクリートで下部を補強している龍之渡井と違い、すべてレンガ造りであり、遠目にも美しい。

■所在地情報・紀の川市西三谷 岩出市道東坂本西国分線1号線の東坂本バス停より東



■ 鯉釣り（紀の川市竹房）
額田正康さん：紀の川市杉原

ホツ と する 風景

Photo Gallery



ふだん何気なく見ている風景に、
ときどきホッとすることは
ありませんか？
そんな心なごむ風景を
みなさんから募集しました。



■ あけびの花
福岡資郎さん：紀の川市桃山町調月



■ 紀の川市西山田
井口和彦さん：紀の川市西大井

■ 大池遊園
(紀の川市貴志川町長山)
大岩紀公子さん：紀の川市尾崎



■ 小田井用水沿い (紀の川市東大井)
谷野本和さん：紀の川市東大井

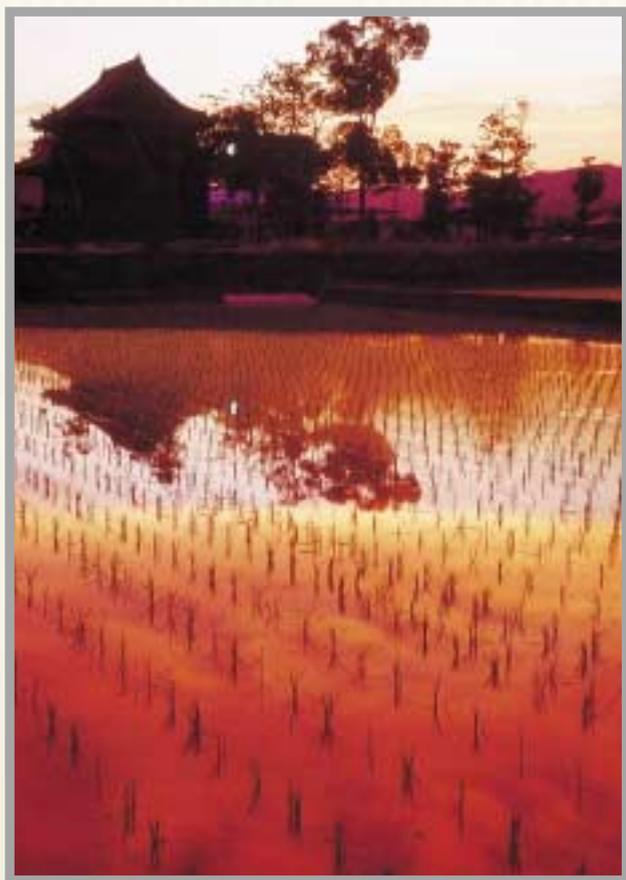


■ 藤崎井用水沿い (紀の川市打田)
筒井勝己さん：紀の川市打田



■ 桃源郷（紀の川市桃山町）

田端順造さん：(株)丸和



■ 紀伊国分寺（紀の川市東国分）

土井康雄さん：紀の川市東国分



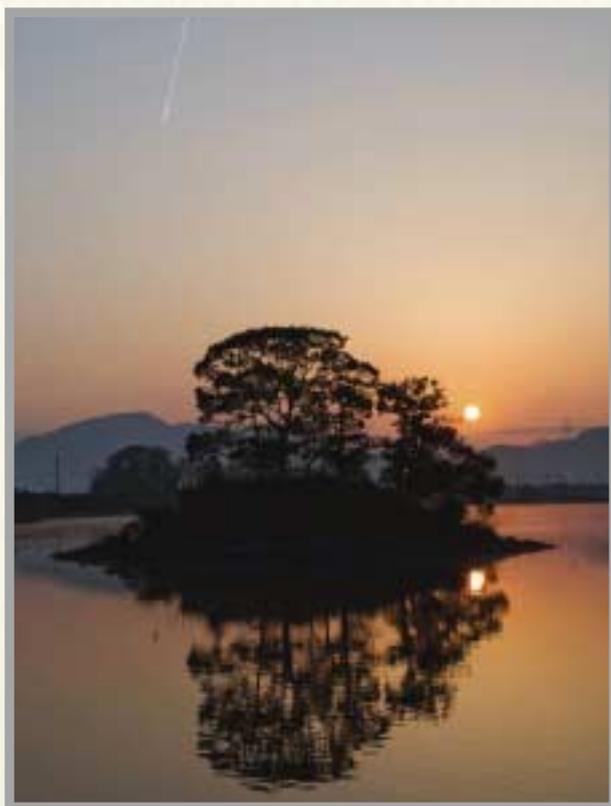
■ 里の秋
(紀の川市桃山町黒川)
藤井保夫さん：和歌山市加太



■ 紀の川市貴志川町井ノ口
竹村雅子さん：紀の川市貴志川町井ノ口



■ 水と土ふれあい公園（紀の川市南中）
保田耕志さん：紀の川市東大井



■ 平池の朝日（紀の川市貴志川町神戸）
中嶋正弘さん：紀の川市貴志川町国主

棚田学会シンポジウム

棚田のルーツを探る

と き：2008(平成20)年5月24日(土)

ところ：紀の川市粉河ふるさとセンター

主 催：棚田学会／紀の川市／紀の川市教育委員会



紀の川市理事
農林商工部長
田中 卓二氏



和歌山県立
博物館学芸員
高木 徳郎氏



紀の川市文化財
保護委員
増田 博氏



紀の川市
生涯学習メントル
鳥淵 弘子氏



早稲田大学教授
棚田学会副会長
海老澤 衷氏

■海老澤衷氏基調講演要旨

「棚田発祥地としての紀の川流域」

～南北朝・室町期の領主と棚田～

棚田の初見をめぐって

「棚田」という言葉は、だいたいい南北朝～室町時代頃から使われはじめました。歴史研究の場で初めてこのことに着目されたのは東京大学の宝月圭吾氏で、宝月氏は『高野山文書』の中に応永一三年(一四〇六)の「僧快全学道衆堅義料田注進状」という史料があり、これに「一反山崎今ハタナ田ト云フ」と書かれているのが「棚田」という言葉が使われた。早い例であろう」と指摘されました。さらにこの史料では、この後に続けて「根本ハ糯田ト名ク、今ハ山田ニテ棚ニ似タル故ニ、タナ田ト云」とあって棚田と名付けられた理由が示され、「アフトニタナ田ト云名アリ、彼トハ不同也」とも記されているわけです。

宝月氏はこの史料の記述から、次のように述べられています。

狭い谷の最奥部に用水池が築造されており、それより引水する極度に零細な猫額大の田地がその下のかかなり急な傾斜面に並立している状況であろう。

この記述は、その後、いわゆる柵田のイメージとして一般に定着していくことになるわけですが、ここで記されている場所は、今の紀の川市の中にある荒川荘という荘園の中で、早稲田大学の中島峰広氏が『日本の柵田』という本の中でおおよその場所を示しておられます。ただ、中島氏がこの本を書かれた当時は、まだ資料が十分に整っておらず、この史料に書かれた場所が具体的にどこか特定できていませんでした。それをさらに前進させたのが東京学芸大学の日本中世



史研究会が行った現地調査で、私自身は、その時の調査報告書を手がかりに、この史料に書かれた柵田の場所をほぼ特定することができたので（図1・2）、それを二〇〇〇年に行われた柵田学会のシンポジウムで報告しました。

ここで問題になるのは、これら二ヶ所の柵田が、かつて宝月氏が描いて、その後一般に定着した柵田のイメージと大きく相違するということです。すなわち、①これらの「柵田」は平野部から丘陵地への傾斜変換点にあつて、決して狭い谷あ



いではないということ、②そして必ずしも猫の額ほどの狭小な田地ではないということ。また、③図2によると、中央に平野氏という荒川荘で下司を務めた一族の屋敷跡があり、棚田の近くに荘園内の有力者の居館があるのも大きな特徴のひとつです。つまり、ここで重要なのは、初めて史料の上に出てくる棚田というのは、それほど山の中に分け入ったところにあるものではない、ということなのです。

その後、和歌山県立博物館の高木徳郎氏は、この紀の川市桃山町元の棚田よりもさらに七〇年ほど古い史料があることを紹介されました。それは高野山領の志富田荘というところでありまして、現在のかつらぎ町東渋田にあたる場所です。その史料は建武五年（一三三八）の志富田荘検注帳で、この場所についても現地での特定がほぼできています（図3）。やはり志富田氏という土豪の館が近くにあり、丘陵地帯の末端という場所に棚田があったということが明らかになり、これにより、紀の川市桃山町の事例との共通点が多いことが認識されて、最初に棚田と呼ばれた場所の立地というのが、以上に述べたような特徴をもったところであるということがほぼ確定できたと考えられます。

それでは、この棚田という言葉は、これより前にどれくら



い遡れるだろうかということですが、私はこの建武五年（一三三八）よりはあまり遡らないだろうと予測しています。と言いますのは、『鎌倉遺文』という、鎌倉時代に書かれた約三五、〇〇〇点の古文書を集めた史料集の中に「棚田」という用例は一点もなく、『平安遺文』にも出てこないから

です。ただ、「山田」という言葉が鎌倉遺文データベースに四〇五件出てくるので、「棚田」はこの「山田」という言葉の中に包摂されているのだろうと思います。一方、京都の町の中などで「店」を意味する「たな」という言葉はあって、「たな」の売り買いをするという史料がありますので、「たな」という言葉そのものはかなり普及していたようです。したがって、「山田」の用例をひとつひとつ腑分けしていくことで、鎌倉時代、平安時代の棚田の実態に近づけるかも知れませ

が、「棚田」という言葉自体は、この建武五年（一二三三）より遡ることはないだろうと考えています。

棚田の評価をめぐる

棚田にはおよそ三つの類型があると思われます。まずA型は江戸時代末期から全国的に展開するタイプで、時にはトンネルなどを掘りながらかなり長く水路を作って、段々畑や山林を一気に水田化することで出現する棚田です。これは明治時代以降も続いたようですが、かつて竹内常行氏が、こうしたタイプを稲作発展の基盤として高く評価されました。

そしてB型は、さこだ迫田型ないしは、関東のほうでは谷内田・やとだ谷戸田型などとも呼ばれるタイプの棚田で、大規模な水路はとくに必要なく、狭い谷間を谷底から這い上がるように登っていく湿田が中心で、このイメージが最初に述べた宝月圭吾氏によって提示された棚田イメージに近いと思われます。九州では、高いところにイノコという湧水点があり、そこから下の小さい谷間に細く連なる水田に水を入れていく事例がみられ、効率性や生産性の高いA型に比べ、その点ではかなり劣っています。しかし、私が親しみを持つのは断然B型です、このタイプの棚田の近くには中世以来のお堂があったり、

宝篋印塔や五輪塔などの石造文化財があって、人々の生活の痕跡つまり文化がそこにはあるからです。

最後のC型は短水路乾田型の棚田で、これが紀の川流域、とくにその南岸にルーツがあると考えられます。これは谷の開口部や丘陵地の先端部分など、比較的開かれた空間に展開し、水田の造成にあたって土砂の切り盛りを伴い、中世の領主館を築造する技術と共通性を有し、付近の谷川から引水するための水路を必要とします。鎌倉時代の武士は意外と平坦な場所に館を設けますが、それが南北朝期になり丘陵の末端に居館を築くようになり、それに伴って棚田がそれに近いところに造成されるようになると考えられます。棚田の造成と居館の建設が連動するわけです。ただ、もちろん注意しなければならぬのは、棚田的な土地利用の形態は、日本の国土の特性から言って弥生時代にはもう既に出現していたにも関わらず、それを「棚田」と称するようになったのが南北朝期ということでありまして、棚田という語彙はC型から生まれて、やがてB型・A型をも含む総合的な用語へと展開したと考えています。

紀の川流域の事例をどこまで普遍化できるか

ところで、以上述べてきたことからは、日本史上どこまで普遍化できるでしょうか。大阪府千早赤阪村の下赤坂に、「柵田百選」にも選ばれている柵田があるのですが(図4)、その柵田については、『太平記』の中で次のように記されています。

彼赤坂ノ城ト申スハ、東一方コソ山田ノ畔重々ニ
高シテ、少シ難所ノ様ナレ、三方ハ皆平地ニ続キ
タルヲ、堀一重ニ屏一重塗タレバ、如何ナル鬼神
ガ籠リタリ共、何程ノ事カ可有ト寄手皆是ヲ侮リ
…〔太平記〕第3巻)

これは元弘元年(一一三三)、後醍醐天皇が笠置山で蜂起したのを受けて、楠木正成が急遽、自分の居館を固めて戦いに臨んだことを記した部分ですが、「山田ノ畔重々ニ高シテ」というのは、柵田を表現したものと考えられます。つまり、城郭(下赤坂城)の一方が柵田によって形成されていて、残りの三方は平らなところだったということでありまして、先ほどのC型の柵田を活用してこの城を築いたと考えられます。そしてそこには、尾根の上に立派な水路



図4



図5

があります(図5)。

この下赤坂城は一ヶ月ほどで陥落し、楠木正成はいったん行方を眩ましてしまいますが、元弘三年(一一三三)には再び赤坂城に立て籠もることになります。この時の様子を、『太平記』は次のように記しています。

此城三方ハ岸高シテ、屏風ヲ立タルガ如シ。南ノ
方許コソ平地ニ繼ヒテ、堀ヲ廣ク深ク堀切テ、岸
ノ額ニ屏ヲ塗り…

こちらは三方が高くて、南はずっと平坦地が続いていたと書かれていて、先ほどの記述と明らかに地勢が違うことが分

かります。したがって、両者の記述を整合的に考えるとすれば、楠木正成は赤阪城（下赤阪城）を落とされて再び戻ってきた時には、もつと守りやすいところ（上赤阪城）へと城を移したということになります。そのため、これを攻める寄せ手も攻撃に苦勞したようで、吉川八郎という者が寄せ手の大将にこう進言しています。

情思案ヲ廻シ候ニ、此城三方ハ谷深シテ地ニ不繼つぎがた、一方ハ平地ニテ而モ山遠ク隔レリ。サレバ

何クニ水可有トモ見ヘヌニ、火矢ヲ射レバ水彈ニ

テ打消候。近來ハ雨ノ降ル事モ候ハヌニ、是程マ

底ニ樋ヲ伏テ、城中へ水ヲ懸ケ入ル、歟ト覺候。

また、別のところでは、人数をたくさん集めて、南のほう

をとにかく一文字にぎつと切ったら、そこから土の底二丈余

り下に樋を伏せていて、側面に石を畳んで上に樋を瓦のよう

に伏せて、水を一〇町すなわち一キロぐらい遠くから引いて

いたということが分かった、とも記されています。つまり暗

渠水路をこの時作った、ということですよ。

すなわち、ここで述べられているように、元弘三年（一二三

三三）の上赤阪城の攻防戦では、水路が非常に問題になって

いまして、そういうことから考えて図5に示したような尾根上の水路は、この南北朝期には既に造られていたと考えられなくもないと思えてくるわけです。楠木正成の時代には、棚田は非常に一般的な存在となっていたのです。

◆まとめ◆

本日述べてきたところをもう一度まとめますと、南北朝（室町前期）において、棚田と城郭は密接に関係していたということであり、それは領主が政治的必要性から棚田を造成し、城郭を構築したためであり、切り盛りの技術と労働力の編成のありかたが、斜面上における造田と築城に共通するものであったためでもあると考えられます。そのような状況の中で、棚田という語彙が輝きを持ち始め、やがて斜面上の水田を代表するものになったというふうに考えられるわけです。それを具体的に検証できる紀の川流域、とりわけその南岸という地域は、日本史上においてたいへん重要な地域であると、私は考えています。

パネルディスカッション要旨

（田中氏）

紀の川流域は、古代から水田が拓かれてきた地域ですが、

とくに、高野山領であった紀の川の南岸では、「タナ田」という文字が文献上最初に記された高野山文書が残されているというところで、今回、棚田のルーツをさぐるとともに、棚田を支える水源林、農業用水路などの歴史的価値を一緒に考える機会にしたく、こうしたシンポジウムを開いた次第です。

海老澤先生のお話にもあったように、文献上、最初に記されたかつらぎ町洪田の棚田、それからわが紀の川市桃山町元地区の棚田、そして「あらぎ島」という有名な棚田がある有田川町、これらいずれも昔、高野山領でありました。したがって、和歌山県の歴史的な棚田地域、つまり棚田発祥の地は、実は高野山と非常に縁が深いわけです。そして高野山には保険会社が試算する貨幣価値にして70兆円の資産価値があるのですが、それを支えてきたのは、実はこの高野山領の棚田地域、われわれ紀の川市の荒川荘をはじめとした棚田地域だったと言えるのではないのでしょうか。

そして、この棚田地域を支える水とその水源については、紀の川流域の水源林が大きな役割をしています。具体的には農業用水などの水源のかん養、土砂災害などの防止、地球温暖化の防止などですが、今後は間伐等による森林の適切な保全を図っていく必要があります。

なお、棚田については平成七年（一九九五）頃から、全国レベルで、これを守っていくという運動が盛り上がりつつありました。この年、自治体主体の棚田連絡協議会が設立され、これを核に、全国の棚田地域の人々が集まって棚田の役割や保全を話し合う「棚田サミット」が、高知県の梶原（ゆずはら）で始まりました。また、平成十一年（一九九九）に棚田を学際的に考えていくという棚田学会が、また、都市住民が主体となつて棚田を守っていくというNPO法人・棚田ネットワークが設立されるなど、国主導ではなく、民間主導で取り組みが進められてきたところに棚田保全の大きな特徴があります。そういった流れを受けて、国でも、平成十一年（一九九九）に「日本の棚田百選」を認定し、和歌山県では有田川町の「あらぎ島」が選ばれております。その他、例えば、中山間地域等直接支払制度や景観法、文化財保護法の一部改正などの形で、棚田地域を支える制度が整えられてきました。

図6は、棚田学会会長の中島峰広氏が作成された全国の棚田地域の分布図ですが、黒いドットが棚田の分布を示しています。棚田とは、二〇分の一以上、つまり二〇メートル以上一メートル上がる、そういう勾配以上の傾斜地にある水田と定義されていますが、全国の水田のおよそ八パーセントが

棚田だと言われています。棚田には、水源林と同じようにさまざまな多面的機能があり、洪水防止や水源かん養、良好な景観形成、保安保健休養機能などがある一方で、耕作放棄が広がったり、過疎化・高齢化によって、法面崩落などその荒廃が進んでいるのが現状です。このため、先ほど申しましたような保全の取り組みが進められており、そのひとつとして、棚田のような人の営みとともに作られた景観を「文化的景観」と位置づけ、文化財に指定する文化財保護法の一部改正が、



図6

平成一六年（二〇〇四）に行われました。

導人が長くなりましたが、本日の主な論点として、二つ挙げたいと思います。一つは紀の川流域の荒川荘や志富田荘の棚田など「文献上最初の棚田」とは、高野山との関連の中で何を意味するののかということ、そして二つは、棚田を支える水源林、ため池、農業用水路等の歴史的・文化的価値とは何かという論点です。

（鳥淵氏）

私は旧桃山町の農家で生まれ、7人家族の中で育ちました。棚田に関係のある思い出として、本日は牛を飼育していた頃の生活体験をお話いたします。昭和三三年（一九五八）頃



までは、どこの農家でも牛を大事に飼育していました。ちなみに我が家では祖父と兄二人が毎日、田の畔で草を刈り、牛に栄養や力をつけるために大きな鍋で麦飯を炊き、ミネラルを補給するために食塩を入れ、飼い葉や糠などを混ぜて餌として与えていました。

この地域には、2〜3年に一度、大きくなった牛と仔牛を交換して、その差額を現金で受け取る「ばくろさん」が在住しておりました。牛を連れて行く前には必ず二人の兄がいつもより丁寧にブラシをかけていたことが今でも忘れられませんが、父も牛を手放さなければならぬ寂しさや、兄たちの気持ちを思うと、きつと辛かったにちがいませんが、「ばくろさんと約束しているから、どうしても連れていかんけれど、その代わり、また小さなかわいい仔牛を連れてくるから、我慢してくれよ、な？」と、諭していました。昭和三六年（一九六二）頃まで田んぼで精一杯働いてくれた牛の数々、あの牛たちがいなくなったら、米も麦も収穫できていなかった



図8



図9

と思います。牛は馬の足と違い、足の裏には牛球があり、指が分かれているので、急な斜面も滑らずに上手に登ることができ、人間の力に及ばないすごい力を発揮して我が家の生活を支え、また心に安らぎを感じさせてくれました。今思い出だけでも、懐かしさと感謝で胸が熱くなっています。

それでは、いくつかの写真を紹介いたします。図7は昭和二四年（一九四九）頃の風景で、牛はまだ仔牛です。図8は苗代で苗とり作業をしているところです。図9は昭和三三年（一九五八）頃の田植えをしている風景で、この頃は子供もお年寄りも、親類や隣近所共同で田植えをしました。図10は、実りの秋を迎え、コンバイン導入前の手作業での稲刈りの様



図10



図11



子です。図11は、ゲンジボタルの幻想的な乱舞風景です。私の住む地域では、川の水がきれいで蛍が楽しめ、毎年ほたるまつりを開催します。最後になりましたが、図12は愛子谷の棚田風景の一部です。以上です。

(田中氏)

鳥測さんには、戦後

の農村の話をして頂きましたが、現在、棚田が少なくなってきたのは、昭和三〇年代以降、選択的拡大という国の政策によって、棚田で米をつくることを止め、桃や柿などの果樹が植えられてきたという経緯にその理由があります。

(増田氏)

江戸時代における紀の川流域の農業用水や治水事業は、全国的にもトップレベルにありました。その紀の川をはさんで、北側は紀州藩領、南側は高野山の寺領と、大まかに分かれて

いたのですが、紀州藩領である紀の川の北岸では、まず江戸時代の初めに、藩の直営事業として桜池というため池が築造されます。紀州藩の初代藩主・徳川頼宣の命令により、延べ四二万人が動員され、計三八ヶ村の水田を灌漑する大規模なため池が築造されました。堤防の長さ三〇〇メートル、高さ二・三メートルで、堤防にかかる水圧に耐えられるよう、刃金はがねといまして、真ん中へ赤土の粉ともち米の粉と水で溶いたのを、こつこつと固めて板を作って、硬さと同時に弾性をもたせた堤防が完成したのです。

その後、江戸時代半ば以降、有名な小田井用水が築造されていきました。これは、高野山麓・学文路村の大畑才蔵という優れた農学者が指導して造った用水路で、高野口（橋本市）の小田村から紀の川の水を引き、扇状地の先端をくねくねと岩出市まで続いています。大畑才蔵の工事の特徴は、ひとつの区間をさらに短いいくつかの工区に分けて同時に着工する点にあり、勾配が三〇〇分の一から五〇〇〇分の一ぐらいしかない緩やかな高低差のところを、簡単な水盛器（水準器）を使って工事を進めました。そのため工期は大幅に短縮され、小田井は一八世紀の初めにはすべて完成しました。そしてこの小田井は、その途中で何本もの中小の河川を越えなければ

ならなかったため、例えば紀の川市の東のはずれにある穴伏川では、三〇メートルほどの川幅のところをレンガ造りの水路橋を架けて渡しております（6頁）。これは龍之渡井たつのとと呼ばれ、レンガ造りになったのは大正時代ですが、それ以前は木枠で作った懸樋を支柱なしで渡していました。

こうした小田井や龍之渡井などを築造した大畑才藏や井沢弥惣兵衛の技術は、ちょうど八代將軍吉宗の時分でしたので、紀州流と呼ばれて関東などでも活用され、全国的に認められたトップレベルの技術だったと言えるわけです。

（田中氏）

増田先生にお話し頂いた用水路やため池は、実は今も現役でして、国としてその保守事業なども行っています。また大畑才藏は、五五歳ぐらいから、今お話しいただいたような活躍をされたと聞いております。いわゆるセカンドライフ、第二の人生がはじまる年齢からの活躍は、現在の高齢化社会を元気づける話ではないでしょうか。

（高木氏）

棚田を含め、人が自然に働きかけ、関わりあうことよって形成された景観のことを文化的景観と言いますが、紀の川市内の文化的景観の事例をいくつか紹介したいと思います。



図13は、京都の随心院に所蔵されている「紀伊国井上本荘絵図」という、鎌倉時代の末頃に描かれた絵図で、ここには紀の川市の北長田から嶋・松井付近にかけての、主に当時存在していたため池やお堂などが描かれています。そして非常に驚くべきことに、鎌倉時代のこの絵図に描かれたため池のほとんどは、現在も残っているか、最近まで残っていたということが分かっています。全国的にみても非常に珍しい事例です。しかもこうしたため池のある景観というのは、農業用水としての機能とともに、棚田の場合と同じように、人々の気持ちを和ませたり、保養とかレジャーのための施設という多

面的な機能も併せ持っており、その保全は、こうした側面からも重要な意味をもっていると思われまます。

同様のことは、紀の川市の魚谷でも言えます。ここには魚谷池（20頁）と中後池というため池が残っていますが、この二つの池も実は鎌倉時代に造られたことがはっきりと分かるため池です。しかも、この二つの池とも、築造に主体的に関わったのはまさに粉河の農民たちであって、その後、限られた水資源をどのように農民たちが配分しながら使っていたかという全国的にも他に例のない稀有な史料も残されており、日本史上、かけがえのない価値をもったため池です。

また紀の川市中鞆淵には、ホリキリと呼ばれる場所があります（8頁）。その名の通り、ここは硬い岩盤を切り通し状に掘り抜いて水路を通した場所で、室町時代の史料にホリキリという地名が出てきますので、今から五六〇年ほど前には、確実に用水路として使われていたことが分かります。このホリキリを通すにあたっては、非常に興味深い伝承が伝えられています。すなわち、この非常に硬い岩盤を掘り抜くには非常に難儀したが、人々はとにかく一日に一升の石くずでも掘り出せば何とか望みがある、ということ、互いに励ましあい、何とかこれを掘り抜いたその時、地面から激しい血し

ぶきが上がってきたといいます。それはこの岩盤が、実は北に聳える飯盛山の神の足の骨であったからで、それから後、この鞆淵では飯盛山の神の怒りを買って、力の強い男は生まれなくなつたというのです。この話を単なる伝承と言ってしまうとそれまでですが、鞆淵では、力の強い男が生まれなくなつたという代償と引き換えに、人と自然との調和を何とか保つことができたということが示されています。鞆淵の人々はこの水路の完成によって、今に至るまで豊かな水の恵みを受けていますが、これこそまさに人と自然の調和的な関係、文化的景観のモデルケースと言える非常に高い価値を持っていると思います。これはまさに紀の川市の宝であり、和歌山県にとっても大きな宝です。

（田中氏）

三人の方々からそれぞれ、紀の川市には現在もその農業を支え、文化財としての価値もある用水路、ため池という宝物があるという話をいただきました。紀の川市の基幹産業は農業です。一六一億円という県下第一の農業生産額を今後も維持していくためには、ほ場整備をはじめとした基盤整備を強力に推進していかなければいけないわけですが、その際にもこういった宝物の価値をきちんと認識しながら取り組んでい

かなければいけないということを、私も認識を新たにしたいところです。

また、先ほど海老澤先生からは、棚田が城郭と結びついていっているというお話もありました。実は、楠木正成に五〇年ほど遡るのですが、紀の川市にも源為時という悪党がおり、高野山に立ち向かって、最終的には旧打田町の高野たかので滅ぼされています。その高野と桃山町元の棚田が、距離的に非常に近いことに気がつきまして、紀の川市においても、棚田と城郭が結びつく可能性があると感じたところです。

(海老澤氏)

鳥淵さんと増田さんにそれぞれ少し質問させて下さい。一つは、私が先ほど紹介した史料に、棚田という田が出てきて、その棚田には高野山の課役はかからないと書いてあるのですが、どうもそれは地元の神様などに捧げられるものだからという気もするのですが、鳥淵さん、どうなんでしょうか？

それから増田さんには、安楽川井（大井）の起源をどう考えたいのか、ということを教えていただきたいと思っています。

(鳥淵氏)

棚田には高野山の課役はかからなかったそれは神様に捧げ

るものであったからではなからうかという海老澤先生のご質問ですが、確か高野山文書に、荒川荘の棚田一反は堅義料田として課役が免除されたと思われています。その棚田の在所は、安楽川の妙見の森の東にあり、前には塔も存在し新開の畠も課役がなくおそらくその頃、神社やお寺へ寄進したものだと考えられるのではないのでしょうか。

(増田氏)

安楽川井の起源については、正直申しまして分かりません。ただ、天正一三年（一五八五）の秀吉の紀州攻めに際して、高野山だけは応其上人の尽力で助かるわけですけども、その応其上人が、中世からあった安楽川井を再興したという史料は残っています。

(海老澤氏)

どうもありがとうございました。

(会場からの発言)

今日の講演の中でいろいろと歴史的なこともお聞かせいただきましたので、たいへん勉強になったのですが、現実的な問題としては過疎化・高齢化が進んでおりまして、私の幼いころに見てきました棚田の景色が、どんどん失われています。日とくに町に出られる方が、植林をされて出られますので、日

照時間も短くなり、保水力も落ちてくるというようなさまざまな問題があります。今後もぜひいろいろなことを教えていただきたいと思っております。

(田中氏)

過疎化・高齢化の状況を率直にお話いただきました。鞆地域でも棚田が失われつつあるということで、市としても何とかその対策にも取り組もうとしているところで、今回のシンポジウムが、少しでもお役に立てていただければ幸いです。パネリストの方々には、今後こういう棚田をはじめとした紀の川市の宝物を、過疎化・高齢化の中でどうやって守っていくかということを含めて一言ずつお願いします。

(鳥淵氏)

私は、多くの皆さまに里山や棚田へ気軽に出かけていただき小鳥の鳴き声や田の畦の草花や棚田を身近に感じて自然を満喫して頂きたいと思います。また、都会の方や世代間交流をし、さまざまな活動を通して先人が残してくれた私たちの宝物である棚田の素晴らしさに気づき保存継承していくことが大事だと思えます。

(増田氏)

先ほどから治水工事や棚田が、すべて優れた文化財だとい

う話があるわけですが、文化財に指定されるということは、本当にみんなで努力をして、文化財をこれ以上失わないように大事に守っていくにはどうしたらいいのかということを考えるいい機会だと思います。そういう点から言うと、このあたりももうずいぶん変わり、せつかくの優れた土木技術も失われていつているわけですが、まだ今は、間に合う最後の機会だと思えます。それと同時に、棚田とは米を作る場です。少し前までは「もう米はあかん」と言われていたのに、この頃また「米が大事や」と言われる。食糧自給という問題を、みんなで真剣に考える必要があると思います。

(高木氏)

なかなか難しい問題が多いとは思いますが、私自身が歴史とか文化財に関わる仕事をしていて、やはりこの紀の川市が持っている歴史や風土というのは、他の地域にはない一つのブランドになると思います。ここでできた産物をブランド化していく時に、この地域独特の歴史、文化がブランドの源になり、それでもって今後生き残ることができるのではないかと思います。博物館というところでは、そういった地元の隠れた魅力を掘り起こすような仕事もしていますので、何かのお手伝いができるかも知れません。

(海老澤氏)

二つほど申しあげておきたいことがあります。一つは、われわれが調査していた時に、古い民家などに黒箱と呼ばれる木の箱に入った古文書がありまして、実はそれによって分かったことがたくさんあるので、そういう古いものを大切にしていただきたいということが一点。それから二点目は、先ほどの高木さんのお話に出てきた「井上本莊絵図」はやはり素晴らしい絵図でして、実物を地元へ戻すことはできないのですが、どこかに複製を展示して、この池が現在のこの池ということが分かるような展示をして頂きたいですね。大きな施設は要らないと思いますが、見学に来た時にまず立ち寄れて、そこからさらに現地を見学できるといような施設があればありがたいと思います。

(田中氏)

今、海老澤先生から、非常に重要な提案をいただきましたので、紀の川市としても、ぜひ、紀の川市の宝物を観光客などに理解してもらおうという努力をしていきたいと考えています。それでは最後に中島先生に本日のまとめをお願いいたします。

(中島氏)

それでは私の感想を含めて、最後に本日のまとめをさせて

いただきます。まず田中さんのほうから、いわゆる棚田保全の略史についてのお話がありまして、パネルディスカッションに入りまして。お三方の話は鳥淵さんに始まって、増田さん、そして高木さんと、だんだん古い時代に遡っていったかと思えます。鳥淵さんがご紹介になっていた牛耕の写真、あれは明らかに棚田の写真でした。昭和三〇年代の中ごろまで、棚田ではまだ牛が使われていたということを教えていただきました。

そして増田さんの話は水利の話でした。素人は、紀の川流域では大河の紀の川の水を使って水田を灌漑していたんだろうと考えがちですが、今日のお話で分かりましたように、紀の川の本流を利用するようになるのは江戸時代の後半になってからのことで、しかもそのためには途中で支流の河川の上を通り越さなければならず、そのための懸樋の工事がたいへんであったというお話がうかがいしました。



そしてさらに高木さんのお話になると、これはもう本流などというのとはとんでもない話で、周辺の山地にため池を造り、中小の河川を使って、時にはホリキリのお話にあったような難工事までして水を引いて水田を拓いてきた歴史があるというお話でした。そしてさらに柵田に関して付け加えると、今日の高木さんのお話の中では触れられませんが、高木さんは柵田学会誌に、私が柵田発祥の史料として注目し、海老澤先生がその場所を特定して下さった桃山の柵田の史料よりも七〇年ほど古い、かつらぎ町の柵田の史料を紹介して下さいました。その時に高木さんは、このように述べておられます。すなわち、この史料の紹介によって、柵田の記述が単に機械的に七〇年ほど遡ったというだけではなく、今まで孤立していた桃山の柵田がこれによって補強され、紀の川流域には柵田という言葉を生み出す歴史的な背景があったということになる、と。

そしてもうひとつ重要なことは、かつらぎ町の柵田にしても、旧桃山町の柵田にしても、谷津田型の柵田だと思えます。日本の柵田の初期の段階というものは、こうした谷津田型の柵田であっただろうと思います。海老澤先生は三つの水路型による三類型の柵田を示されました。私はもっと簡単に柵田を

二類型とし、谷津田型の柵田と、斜面型の柵田に区別するならば、まず谷津田型の柵田があり、そして斜面型の柵田が生まれて、あの傾斜地に一面に広がる柵田のイメージが生まれてきたのだと考えています。そういう意味でも、この紀の川流域は柵田のルーツというにふさわしい地域だと思えます。今後それを「宝」にされて大いに活性化されていけばよろしいのではないのでしょうか。

最後になりましたが、柵田学会のシンポジウムを企画して下さった紀の川市、そして紀の川市教育委員会、さらにご協力いただきましたかつらぎ町の皆様方、そして本日ここにご参集して下さいている皆様方に、厚く御礼を申し上げます。私のご挨拶とさせていただきます。本当にどうもありがとうございます。





今回、紀の川市を舞台にして開かれたシンポジウム「棚田のルーツをさぐる」は、学会員の探究心を募らせてきた文献上初見の地を実見するという願望を叶えさせるとともに、その起源について地域の方々とともに議論を深め、改めて紀の川流域が棚田揺籃の地であることを明確化させたことできわめて意義深いものがあつた。さらに、紀の川の藩政期における水利用が支流河谷を利用した「池掛り」から本流を利用した「井路掛り」へと展開していった過程を詳細に知りえたことは望外の収穫であつた。これを機にして、この地域に存在した棚田が歴史上貴重な遺産であるという認識を新たにして、これを地域の宝として活用され地域の活性化に結びつけられることを切望して止まない。

最後にこのような機会を与えてくださった紀の川市長、市の関係者及び後援してくださった和歌山県・かつらぎ町の関係者のみなさんに感謝申しあげる。

棚田学会長 中島峰広



恵みの源^{みなもと}

受け継がれてきた水資源

[農業用水水源地域保全対策事業]

発行：紀の川市

初 版：平成21年3月

第 二 版：平成22年3月

問い合わせ先：〒649-6593 紀の川市粉河412番地

紀の川市役所 粉河分庁舎 農地課

TEL 0736-73-3311

<http://www.city.kinokawa.lg.jp>

協 力：和歌山県立博物館

棚田学会

編 集：株式会社 日本出版